

小学校第六学年 国語 「作品を推敲すいこうしよう」

○ 正答例

一

2

4

二  
(1)

・ 胸がしめつけられる  
 ・ 胸がはりさける  
 ・ 涙があふれる  
 ・ 涙が出る  
 ・ 心が乱れる  
 ・ 心がちぎれる

・ (涙で) 視界がにじむ  
 ・ (涙で) 視界がぼやける  
 ・ 言葉にならない  
 ・ 言葉が出ない  
 ・ 鼻のおくがつんとなる  
 ・ 泣きさけぶ  
 などから三つ

(2)

**【例 1】**
 祖父との思い出がこわされてしまうようで、涙があふれてきた。

**【例 2】**
 桜のなくなった堤防を思うと、鼻のおくがつんとした。

○ この問題で身につけてほしい力

○ 意見や助言をもとに、よりよい表現を考える力

○ 考え方

一 自分の書いた文章を推敲するときには、自分の目だけでは気づかない改善点がたくさんあるものです。  
 だからこそ、友だちとの交流を通してよりよい表現を工夫する必要があるのです。  
 推敲するときに気をつける観点をあげてみます。

○ 自分の意見や考えがはっきりと表現されているか。  
 ○ 読み手が分かりやすい組み立てになっているか。  
 ○ 読み手に伝わりにくい表現はないか。  
 ○ 読み手を引きつける表現をしているか。

こうした観点をもとに、よりよい表現を考えていくのです。また、このような観点から助言することで、助言を受けた側も作品の推敲を進めやすくなります。  
 問題では、**2**が読み手を引きつける表現、**4**が読み手に分かりやすい組み立てに関わって助言された内容となっています。

二  
(1)

「悲しい」「うれしい」といった、書き手の心情を直接表現する言葉は、読み手のイメージをせまくすることがあります。もちろん、「悲しかった」と表現することで、読み手の胸にせまる文章になることもあります。  
 ですから、両方を使い分けることができいいのです。  
 今は、心情を直接でなく表現する言葉や方法を、少しずつたくわえていくことが大切になるでしょう。

(2)

**【例】**
 では、二種類の答えを示しました。

**【例 1】**
 祖父との思い出がこわされてしまうようで、涙があふれてきた。

**【例 2】**
 桜のなくなった堤防を思うと、鼻のおくがつんとした。

こちらは、もとの文の意図だけを残して推敲したものです。  
 どちらの文も、書き手の思いが表現されています。ですから、どちらのように書いても問題ありません。

実際に推敲する場合は、読み手によりしつかりと伝わる表現にするにはどうすればいいのか、考えながら取り組めばよいでしょう。